

「二・四事件」と長野県師範学校 —「赤化」思想の培地としての師範学校—

長谷川鷹士

はじめに

本論文は長野県師範学校の教育が「二・四事件」の発生に何らかのかかわりがあったのかを考察するものである。

筆者は師範教育が師範学校生徒及び卒業者の教育実践や思想傾向にどのような影響を与えていたかを明らかにする研究を構想している。本論文はその一部に位置づくものである。

1933年2月4日からおよそ7か月間にわたり、日本共産党や日本共産青年同盟、その他の労働組合、農民組合関係者が相次いで検挙されたのがいわゆる「二・四事件」である。特に全検挙者608名中、教員が230名を占めていたことから「教員赤化事件」としてセンセーショナルに報じられることとなった。長野県学務課は「事件」に対する善後策を議論する中で、教員たちが社会主義思想に接近した素因として「1、長野県教育者の理想主義的風潮並感激性 2、長野県教育者の研究心の旺盛及其徹底性 3、青年層に早く左傾思想の浸潤を見、その刺激を受けたること」の3点をあげている¹。社会主義思想への接近の理由として、こうした長野県教育者の性向をあげているのは当局者のみではない。例えば岩波書店創設者の岩波茂雄は「研究心、向上心、感激性に富み、又新奇を追究する傾向の旺んなる信州教育者が、矢張りマルキシズムに興味を持ち、その研究に没頭し、その結果その是なりと信ずるところを実践に移さんとする傾向のあるのは考へられぬ事ではない」と述べている²。このように長野県教育者の社会主義への接近には、彼らの研究心が深くかかわっていたという認識は官民一致したものであった。

以上のような長野県教育者の研究心に富む性向を育むうえで、師範教育は何らかの役割を果たしたのだろうか。また彼らが社会主義思想を学んだことにも師範教育は何らかのかかわりを持っていたのだろうか。この点についても長野県の当局は議論を重ねている。すなわち1933年4月11日の長野県臨時県議会の秘密会では高坂応平が、大正15年から昭和4年の間に長野県師範学校を卒業した生徒が「赤化教員」として多く検挙されたという学務部長の発言を受け「其間ニ於ケル師範教育ニ何等カ欠陥ガアリハセムカ」と質問している³。これに対して長野県学務部長古賀精一は「其当時ノ師範学校教習或ハ教授ノ方法等ニ付テ、校長ニ付テ調べテ見マシタガ、一向ニサウ云フ風ナ欠陥ヲ見出シ得ナイ」と師範教育に問題はなかったと応じている⁴。ここで古賀が述べているように社会主義に生徒たちを導くような明らかな「欠陥」は長野県師範学校にはなかったのであろう。しかし、先述の通り学務課自体が認めているように長野県教育者の研究心は高かったのであり、そのことに長野県師範学校の教育がなんらかのかかわりを持っていた可能性は充分にある。

本論文では長野県師範学校の授業や生徒の読書環境を明らかにし、生徒の研究心の涵養や社会主義思想への接近に長野県師範学校がなんらかの役割を果たしたのかを考察する。

こうした検討は師範教育が生徒の思想傾向などに影響を与えられたのかの一端を明らかにするものであり、そのことには今日の教員養成を学生の社会観や教養形成の観点から考察する場合の、一つの歴史的素材を提供できるという意義がある。

次に先行研究を整理する。まず後継学校の年史である『信州大学九十年史』があげられるが、基礎的事実を集積した資料集という性格が強い⁵。次に『長野県教育史』では、大正期の長野県師範学校生徒がどのような本を読んでいたかなどが分析されており、重要な先行研究である。最後に稲垣忠彦、寺崎昌男、松平信久編著の『教師のライフコース』では1926年入学の第一部生、1930年入学の第2部生を対象として自身の受けた師範教育について戦後にアンケート調査を実施している。同時期の長野県師範学校の教育が全体的に自由主義的であり、研究心を刺激したと述べている点で、重要な先行研究である。しかし、彼らは「二・四事件」で検挙された主要な教員達の後輩であるため、「二・四事件」に師範教育がどのような影響を及ぼしたのかを分析することはできない⁶。本論文では「二・四事件」への影響を明らかにする視点から、長野県師範学校の教育を分析する。

最後に本論文の分析課題を示す。第1に「二・四事件」で逮捕された教員たちが師範学校時代にどのような教育を受けていたのかを明らかにする。逮捕された教員たちが戦後に発表した回顧談などを分析し、彼らの受けた師範教育が研究心を刺激するようなものであったのかを検討する。第2に「二・四事件」で逮捕された教員たちが在学中にどのような本を読んでいたのかを明らかにする。座談会や回顧録、校友会雑誌を分析することにより長野県師範学校でどのような本が読まれたのか、またそれは他の師範学校と比較した場合、どのような特色があったのかを明らかにする。こうした作業を通じて、長野県師範学校の教育が「二・四事件」を可能にした培地となっていたのかを検討する。

1. 長野県師範学校の教育の特色

1969年に二・四事件記録刊行委員会が発刊した『抵抗の歴史』には逮捕された教員達の座談会の記録が掲載されている。座談会は同年1月に開かれたものだが、その内容に『新教の友』などに掲載された談話などが適宜挿入されたものとなっている。なお座談会の発話者は匿名とされているが、経歴から推定可能の為、推定される人名で記載する。ここでは主にこの座談会記録を用いて、彼らが受けた長野県師範学校の教育がどのようなものであったかを明らかにする。

司会者が「当時の長野の師範教育はどうだったのでしょうか」と問うたのに対し、藤原晃は「長野の師範の先生達には一流の学者が来ていて、例えば哲学ですと自分の書いた二〇〇〇ページもの本をテキストに使って倫理の科目を教え、心理学は原書を使う」というものであり「俺はこれでいくぞというものを自分で求めるという雰囲気は師範学校で植えつけられた」と研究心を刺激されたと述べている⁷。藤原は1926年に長野県師範学校第一部を卒業しているから、彼の授業を担当した教員は、哲学は篠原寛二、心理学は杉崎瑠であったと考えられる。篠原は東京帝国大学、杉崎はカリフォルニア大学出身であったから、藤原の言う通り、学者的であったとしても不思議はない⁸。また長野県師範学校第二部を

1929年に卒業している奥田美穂も自身の師範学校時代を振り返って「二部生は実に自由でした。後に新聞記者として東京の学校現場に出入りしたが、東京とは全然違った空気でした」と述べている。ただし「二部の一年間では、何か一つの物を持って長野県の教育に貢献しなければならないという気持はとてもできなかった」と藤原が述べているほどの影響はなかったとしている⁹。

以上のように長野県師範学校に在学した教員達はその教育が自由であったと述べている。そして、奥田は、それは他の師範学校にはない特色であったと述べている。実際、座談会に出席していた神奈川県師範学校出身者は「ほとんど軍隊と変わら」ず「舎監が嚴重に取り締まっていて、家族でも女手の手紙等は問題にされるという状況」であり、「教育勅語そっくりそのまま人間に変えたようなものを要求された」と述べている¹⁰。

以上、長野県師範学校の教育がどのようなものであったかを主に座談会での発言を分析することで検討したが、他の師範と比べ自由主義的で、また学究的であった様子が窺えた。次により具体的に生徒たちがどのような本を読んでいたのかを検討する。まず座談会で彼らが語る読書体験を分析する。そのうえでそうした体験談を裏付けるために校友会雑誌などに掲載された図書館の蔵書や貸出履歴などを分析する。そのことによって長野県師範学校に自由主義的雰囲気や研究心を涵養するような文化があったのかを検討する。

2. 長野県師範学校の読書文化

(1) 座談会での発言

『抵抗の歴史』に掲載された座談会では師範学校時代の読書体験も語られている。まず藤原は「私はどういうものか学校時代から哲学が好きでした。それで大げさにいえば人生とは何ぞや、どういう風に生きたらよいかに対する関心が深く、比較的力を入れて哲学の勉強はしておりました」と述べている¹¹。あるいは西條億重は「私も学生時代哲学が好きでいろいろ勉強しておりました。昭和四年の卒業でその頃はヘーゲルのもの位まあなんとか読んでいたという状態です」と述べている¹²。

以上のように彼らは、師範学校在学中は哲学書の読書に力を入れていたようである。彼らが社会主義に接近するのはむしろ教員に就職してからであった。例えば藤原は「ちょうど永明に行ったあたりから不況に出会」い、その解決を求め「経済哲学というか唯物論哲学」を読み、社会主義運動に接近したと述べている¹³。西條も「『唯物論と経験批判論』を昭和四～五年ごろに、『組織論』とかプロフィンテルンの第五回大会議事録を読んだのは、たしか昭和六年ごろです」と本格的に社会主義思想に触れたのは師範学校卒業後であったと述べている¹⁴。師範学校時代は後に社会主義文献を読むうえでの準備期間であったと言える。

(2) 蔵書

次に長野県師範学校の蔵書を検討する。師範学校の蔵書からは学校側が生徒にどういった本を読むことを認めていたかを窺うことができるだろう。長野県師範学校の学友会が発行していた『学友』の「彙報」欄には学友会図書部の新規購入図書や貸出冊数が数回、記

載されている。従って蔵書全体の書名を復元することはできないが、こういった本を読むことを許可していたのかの傾向は窺うことができる。ここではその内容を分析し、長野県師範学校が認めた範囲で、生徒がこういった書物を読むことが可能だったかを明らかにする。

まず購入図書については『学友』77号に1926年度のものを窺うことができる¹⁵。購入図書一覧が記載されており「辞書」「文学」「創作」「翻訳」「教育」「心理」「哲学」「倫理」「宗教」「法経社会」「美術音楽」「理学」「博物」「地理」「歴史」「雑」「信濃文庫」「全集」の18部門に分類されている。いくつか代表的なものを示すと「文学」では『新古今和歌集詳解』や『万葉集の鑑賞及びその批評』といった教育現場で教えるうえで役立つと考えられる書物があがっている。一方で『ロシア文学史』など純粋に教養主義的立場から加えられたと考えられる書物もある。また『アララギ 赤彦追悼号』など郷土の文人関係の書物も購入されていた。「創作」では尾崎紅葉『金色夜叉』や島崎藤村『藤村読本』など日本の近代文学を代表する作家の本が並ぶ。その中に『磔茂左衛門』があがっているのは注目に値する。これは全日本無産者芸術連盟の初代委員長を務めたことでも知られる藤森成吉が1926年に制作した戯曲であり、初期プロレタリア演劇の代表作として知られている。「翻訳」にはトルストイ『復活』やゲーテ『若きエルテルの悲み』など教養主義的色彩の強い本が並んでいる。「教育」ではルソー『エミール』やデューイ『学校と社会』など教育思想系統の本があるとともに鶴居滋一『合科学習の実施とその一般化の研究』など教育実践に関わる書物も購入されている。「心理」では『智能心理学』や『児童心理学序説』など教育心理関係の著作が目立つ。「哲学」では『論理学概論』や『西洋哲学史』などがある。注目できる点としてはプラトン『パイドン』があること、またマルクス『哲学の貧困』があることである。教養主義やマルクスの思想に触れることができたのである。また「法経社会」にも『現今小学校令及学事関係規則解釈』や『六法全書』『国際法概説』がある一方で『マルクス学説大系』や高島素之『マルクス十二講』などマルクス関連の書物がある。また細井和喜蔵『女工哀史』や社会思想社編『各国無産政党発達史』など労働者、無産運動関係の書物もあげられている。

以上、長野師範学校の蔵書の一部を概観したが、多種多様な書物が集められており、またマルクス主義や社会主義に近い書籍も所蔵されていたことが確認できる。ただし、ほぼ同時期の1925年の第六高等学校の蔵書と比較した場合、六高にはプラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』やカント『実践理性批判』があり、また『マルクス全集』があった¹⁶。従って確認できた範囲では教養主義、マルクス主義ともに長野県師範学校の蔵書はレベルの下がるものではあった。

しかし、他の師範学校と比較した場合、長野県師範学校の蔵書は豊富だったと考えられる。例えば1927年度の岡山県師範学校の図書室で新たに購入された図書は『鴉外全集』『岩波哲学辞典』『篠原氏教育辞典』『ペスタロッチー全集』、鶴見祐輔『北米遊説記』、中里介山『大菩薩峠』などであった¹⁷。すべてを網羅しているわけではないが、長野県師範学校と比較すると社会主義関係や哲学関係の書物は少ない。

以上のように長野県師範学校の蔵書は旧制高校と比較すればやや劣るものではあったが、他の一部の師範に比べて豊富なものであった。では、こうした図書を生徒はどの程度活用していたのだろうか。次に貸出冊数を検討する。

(3)読書の傾向

『長野県教育史』には生徒たちが好んで読んだ雑誌や図書についての記載がある。時期的には藤原晃や小松俊蔵が在学していたことになる。以下、こういった雑誌や図書が読まれていたかを分析する。

1922年10月14日に当時の校長磯貝泰助が県に回答した「生徒ノ講読スル雑誌名及購読者数」によると『中央公論』28人、『中学世界』26人、『改造』17人、『科学の智識』16人、『文章倶楽部』15人、『思想』13人、『創作』12人、『婦人公論』『受験と学生』各10人、『早稲田文学』『新潮』各7人、『現代』6人、『解放』4人、『白樺』2人など総合雑誌や文芸雑誌が読まれていた¹⁸。また1925年1月20日に磯貝の後を受けた豊田潔校長が文部省に回答した「生徒ノ思想調査ニ関スル件」のなかで、デモクラシー思想を持つ生徒がよく読む書物として、生田長江『社会問題十六講』『近代思想十六講』や帆足理一郎『婦人問題概論』、河上肇『社会問題集』『大学法科教育ノ改善』などがあげられている。またよく読む雑誌としては『文書クラブ』15人、『科学知識』『改造』各13人、『中央公論』『キング』『現代』各10人などとなっている¹⁹。藤原や小松が在学していた時期には、総合雑誌、文芸雑誌から大衆雑誌まで幅広く読まれていたといえる。

次に『学友』83号に掲載された貸出冊数を分析する²⁰。年度的には「二・四事件」の前年であり、事件に関わって逮捕される教員のほとんどが卒業したのちの、長野県師範学校の読書傾向を窺える資料である。その内容を表-1に示す。

表-1 図書閲覧統計(1932年度9か月分〔4月～12月〕)

	雑	教育	哲学	文学	芸術	歴史	理学	博物	地理	社会 科学	合計
貸出 数	238	498	527	1381	149	349	527	149	433	180	4431
蔵書 数	235	486	380	821	137	300	192	116	192	216	3075
なお1932年度の生徒数は393人(内、専攻科在学44人)											

『信州大学教育学部九十年史』『日本帝国文部省第六十年報下巻』より筆者作成

具体的な書名までは分からないが分類ごとの蔵書数、貸出数は把握することができる。最も多く所蔵しているのは文学であり、次いで教育、哲学となっている。実際の貸出数が多いのは文学、哲学、理学、教育となっている。文学、哲学が多く貸し出されていることから、藤原達が座談会で述べていたような傾向が、彼らの卒業後も続いていたと言える。

この貸出傾向を見る限り、社会科学が多くの生徒に読まれていたとは考えられない。ま

た先の新規購入図書の分類からすると社会科学は「法経社会」にあたり、法律集などの貸出も含まれていると考えられる。長野県師範学校にあっては社会科学系の本を図書室で借りて読むことは一般的ではなかったといえる。

なお蔵書数に対して貸出数が突出して高いのは理学、地理だが、その理由は判然とはしない。ただ1926年度に新規購入した書名を見ると「理学」は『物理学計算問題』や『物理学詳解講義』『数学諸論大要』、「地理」は『天文講話』『地文学精義』『人文地理講話』など概説や教科書的な書物が多いため²¹、授業対策で多く貸し出されたと考えられる。以上のように愛読書や貸出冊数から見ると、長野県師範学校では総合雑誌や文学、哲学が多く読まれていたと言える。

こうした長野県師範学校の読書傾向は他の学校と比較した場合、どのような特徴があるのだろうか。まず新潟高等学校の1928年度の貸出冊数と比較する。新潟高等学校の貸出数は以下の表-2のようになる。

表-2 新潟高等学校貸出冊数(1928年度)

	総類	哲学、 宗教	教育	文学、 語学	歴史、 地理	法制、 社会	理学	工学	芸術	産業
貸出 冊数	20	137	43	9689	208	210	3890	394	122	3
なお1928年度の生徒数は454人										

『資料集成旧制高等学校全書』『日本帝国文部省第五十六年報下巻』より筆者作成

長野県師範学校は9か月間の貸出冊数であり、新潟高校は1年間の貸出冊数である。また分類にも違いがある。そのことを考慮に入れても、「文学、語学」と「理学」の貸出数は新潟高校が大きく上回っている。ただし「教育」が長野県師範学校のほうが多いのは当然にしても、「哲学、宗教」では長野県師範学校が大きく上回っており、「法制、経済」でも遜色ない貸出冊数となっているのは、生徒数から考えても注目に値する。

新潟高校以外の旧制高校について検討すると、例えば1931年の姫路高等学校の読書調査ではよく読む本の種類として、文科の生徒についてみると文学が52名、経済が28名、哲学が14名、法律が12名、社会科学11名、歴史が9名、政治が8名、宗教5名、その他自然科学等が数名となっている²²。あるいは1933年8月から1934年10月までの富山高等学校生徒の読書傾向は文科では「岩波書店の哲学叢書、世界大思想全集、大思想エンサイクロペディア、及び波多野精一氏の西洋哲学史要」などの哲学書、「夫よりも文学の方面」が「多分に読まれる傾向があ」り、西洋文学では「英文学の研究者英文学叢書、坪内逍遙氏の沙翁全集、ドイツ文学のゲヨエテ之に次ぐ」という状況であった²³。つまり、姫路高等学校も富山高等学校も文学が最も多く、それに哲学が続くといった傾向であった。従って、長野県師範学校の読書傾向はこうした旧制高校の場合と似通ったものであったと言えるだろう。

次に他の師範学校の場合と比較しておく。先述の1927年の岡山県師範学校では「地理、

歴史〔、〕教育、社会哲学、物理化学等の部分から多く読まれてゐる」という読書傾向になっている。具体的書名は「漱石全集、樗牛全集、大日本地理集成、大日本地誌、地文学精義、東洋歴史詳解、西洋歴史講話、オルレアンの少女、物理学精義、桂月全集、思出の記、弱きものの上に、国文学史概論、欧州教育史、心理学通義、青年教師の歩める道、哲学概論、教育の根本問題としての哲学、国民道德概論、倫理学演義、倫理学概論」となっている²⁴。読書傾向については長野県師範学校や旧制高校と比べる場合、文学があまり読まれていない点が指摘できるだろう。

以上のように長野県師範学校の読書傾向は旧制高校と比較しても遜色のないものとなっていた。他の師範学校と比較した場合については今後の課題であるが、かなりの程度学究的な読書傾向であったことは窺える。

おわりに

以上、長野県師範学校の生徒がどのような教育を受け、どういった本を読んで来たのかを分析した。その結果を簡単に示すと共に、そうした長野県師範の教育が「二・四事件」の発生にどのように関わっていたかを考察する。

まず「二・四事件」で逮捕された教員たちが師範学校でどのような教育を受けていたのかを検討した。その結果、彼らは他の師範学校に比べて、自由主義的で、また学究的な教育を受けていたことが明らかになった。「哲学」や「心理学」を大学出身の教員から、原書などを使って教えられていたのである。

次に長野県師範学校の蔵書や読書傾向を他の師範学校や高等学校と比較検討した。図書室の蔵書は哲学や社会科学等にもおよび、幅の広いものとなっていた。同時代の高等学校と比べた場合、やや見劣りするものではあったが、岡山県師範学校と比べた場合には、学究的と評価しうるような蔵書であった。また貸出傾向については、同時期の高等学校と比較して、遜色のないものであった。

以上のような事実から長野県師範学校の教育が生徒の研究心を刺激したということが考えられる。先の藤原の発言からわかるように、原書などを使って、専門的な教授をする長野県師範学校の教育は、生徒の研究心を刺激していた。また長野県師範学校の蔵書が岡山県師範学校と比べ学究的であったこと、貸出傾向は高等学校と比較しても遜色のないものであったことも、「二・四事件」逮捕者やその周囲にいた長野県師範学校卒業者が多分に学究的であったことに何らかの影響を与えていたと考えられる。こうした師範教育が、藤原が「学校の状況でいうと、左翼文献の読書会をもつという『研究はよろしいだろう。しかし溺れるなよ』という注意はあっても、公然と研究会がもてる大まかな雰囲気はあった」と証言するような²⁵、長野県の小学校の研究活動に対する寛容さを生み出したと考えられる。この思想的寛容さが「二・四事件」につながる思想研究活動を可能にしたことから考えて、長野県師範学校の教育が、「二・四事件」を可能にしたとも考えられる。一般化するならば、生徒の社会観を養ううえで、相対的に自由な学習環境は有用であったといえる²⁶。

以上、長野県師範学校の授業や蔵書が、「二・四事件」にどのようなかわりを持っている

たかを考察した。最後に今後の課題を示す。師範学校の授業内容を考察する場合、教育学関係の科目がどのように教授されたかも重要な分析対象である。「二・四事件」では修身科などについて、教員たちが独自の教材を編成している。そうした作業に師範学校時代に学んだ知識が生かされているのか、否かを分析したい。また、蔵書等についても引き続き資料調査を進める必要がある。

注

- 1 『信濃毎日新聞』 1933.9.16。
- 2 岩波茂雄「教員思想事件に就いて」『信濃教育』第564号 1933.10、 p.6。
- 3 二・四事件記録刊行委員会『抵抗の歴史—戦時下長野県における教育労働者の闘い—』労働旬報社、1969、p.295。
- 4 同上、p.302。
- 5 信州大学教育学部九十年史編集委員会『信州大学教育学部九十年史』信州大学教育学部創立九十周年記念会、1965。
- 6 稲垣忠彦、寺崎昌男、松平信久編『教師のライフコース』東京大学出版会、1988。
- 7 二・四事件記録刊行委員会、前掲、p.31。
- 8 信州大学教育学部九十年史編集委員会、前掲、pp.218 - 219。
- 9 二・四事件記録刊行委員会、前掲、p.31。
- 10 同上。
- 11 二・四事件記録刊行委員会、前掲、p.32。
- 12 同上、p.36。
- 13 同上、p.33。
- 14 『志をほほえみにつつんで—厚生館とともに—西條億重追悼集』編集委員会『志をほほえみにつつんで—厚生館とともに—西條億重追悼集』厚生館、1997、p.352。
- 15 信州大学教育学部九十年史編集委員会、前掲、pp.329 - 330。
- 16 旧制高等学校資料保存会『資料集成 旧制高等学校全書 第七巻 生活・教養編(2)』旧制高等学校資料保存会、1984、pp.579 - 586。
- 17 安達隆明「図書部記事」『嚶鳴』第126号、岡山県師範学校共成会、1927.12.20、p.351。
- 18 長野県教育史刊行会『長野県教育史 第十四巻 史料編八』長野県教育史刊行会、1979、p.854。
- 19 同上、p.860。
- 20 信州大学教育学部九十年史編集委員会、前掲、p.331。
- 21 同上、p.330。
- 22 旧制高等学校資料保存会、前掲、p.587。
- 23 同上、p.592。
- 24 安達隆明、前掲、p.351。
- 25 二・四事件記録刊行委員会、前掲、p.30。
- 26 ただし、長野県師範学校ほど、「教養」にあふれてはいなかったと考えられる岡山県師範学校でも生徒は一定程度の社会観は持っていた。詳しくは拙稿「岡山県師範学校生徒の思想傾向に関する一考察—1919年実施調査の分析を中心に—」『地方教育史研究』第39号、2018参照。